

第九章

口承文芸と芸能

第一節 伝 説

伝説については、明治百年記念事業の一環として、昭和四十三年に和泊町が発行した「沖永良部島郷土史資料」に収録されている大正十年四月、武山宮定先生の稿をそのまま転記した。

一 茶上兼伝説

ちやじょうがね

世の主の御子に茶上兼という若様が御出でありました。漆の様な御髪を太々と豊かに御貯はへさせられ花の顔、月のみまゆ中々上品な御育ちで御兄弟の何の方々よりも気品が優れて御出でしました。

大和の王様が大親役言付けのために茶上兼をお召しになりました。

茶上兼は荒里金鋭主並に久志陰友二地を従へて上国の途中大島に汐掛りをなし、出帆して幾日目に七島灘に

差しかかりました。

水は盥たらいの様に七島灘の面かげもなく静まって、中々無難でしたが困った事には風が凧いで一步も進んで呉れない。此の時金鋭主と友二地の二人は、茶上兼を殺して、自分達が茶上兼の役位を授かるうと謀んだ。そして二人の謀で風待願の宴会を催して船人にも大いに酒を供し、茶上兼を全く酔はせて前後不覚になして置き、甲板に連れて海に押し落して了った。

茶上兼始めて彼等の隠謀をさとり、全力を挙げて舷に撃ち上らんとするのを、友二地等が水竿（ミゾ）を以て滅多打ちに打ちかかる茶上兼は

「水飲ミヅヌだんて 死にゆんにや

汐飲ウシエヌだんて 死にゆんにや

と攀じ上らんとするのをあはれ髪の結び解けて手足をまとい、誇りの黒髪も今は却って禍の種とうとう海の藻屑と成り果てました。

二人の者ども漸くの事にて心落ちつき

「あなたは茶上兼と名乗れ、私は金鋭と名乗ろう」と友二地の意見に従って着鹿後の準備が調いました。

風も順を追い鹿兒島に着いて見ると驚いた。船よりも

先に茶上兼の死骸は前ノ浜に打ち上げられて前から諸役達はその死骸の高貴な人である事を察して騒動中であつた。

金鋭並に友二地暫しが程は我意を張つて居たが悪謀遂に包み切れず。罪の軽重を問ひ友二地は、ハダ門に挙げられ、金鋭は放免という事になりました。

友二地の子孫は其のために大和旅が出来ぬ事になり、遂にそのたたりで子孫絶滅という事になった。

二 真千鎌の伝説

昔、世之主の世、古里のメーヒヤに真千鎌という器量の良い女が居た。世之主様が釣りに下る吾と通り近くに居る事とて、何時の間にか世之主のお目に止りお召しになつて内城のヘンタに居らしめた。

兎角している中に真千鎌は世之主の種をやどして玉の様な王子が生れる。ずんずん成長する。十四の年になると武芸も中々達者になつてくる。そこで世之主は、其の気性をためさんために直城まで縄を張り、「我子ならば渡れる、人の子なら落ちて死ぬるに相違あるまい」と縄

渡り試験を致せしに首尾よく渡つて了つた。

王子は、大屋子御拜命の為上国なさいましたが、其後世之主はあの御騒動のために御割腹召され、一門皆亡んで、真千鎌は詫び住いに幾年か経ましたが、王子の音沙汰が一向に聞えぬ。御衣調度など調べて機を幾機か織り切つて大屋子の準備を調べて置いたが、とうとう御帰国が無い。

高貴な方の妾なれば、寄りそう男もなく、世間もなく真千鎌の美貌もいつしか色褪せて見る影もない有様となり、うば玉の髪も散り乱れてシラミさえ湧き出でとうとうもだへ死にました。世俗伝えてシラミに嘔倒されたというて居たそうである。

世之主の御家来どもが、真千鎌のお里帰りの折暗くなりますと東石橋までお迎へに行つたもので

東石橋に あんどまち とぼち

と歌つたのだそうです。 お迎(ムケ) しやぶら

此女のお屋敷跡は、今の小山家の東で近い昔まで其の足洗の堀りにはマンク木の葉も落ちず汚れもせなかつた。御老人の方々がこの池は御大切にせねばならぬ。人

に売つてもならぬと申して居たそうで、此古池から出た宝物が只今小山家に保存されて居ます。

三 稲当由四里

ユシリガタマの由来

昔世之主の時代に東稲当に由四里という大力無隻の大男が居た。脛の長さ二尺というのだから大外れたものでしたらう。

クナハという所に今尚お由四里の足掛石というのがあつた。先づ一つの石に臀を載せ足を前に投げ出して股を張つて二つの石に左右の足を掛けながらよく四方の景色を眺めたものだそうですが、足かけ石が六尺も離れて居るから股が六尺も張られたものである。石の上面は、足踏形(アブミ)をなして居る。腰かけた一つの石は近頃どうなかつたか失せてなくなつて居る。

或日、由四里の伴何某が前当で由四里に向かつて、「お父さん俺と角力を取つてみようか」といふと「何じやくつされ童べが」と、大きな手を拵けて子供の額から後頭まで一握みに握んで見たら子供の頭がブリブリ歪んでひし

げて了つたとか。又両足を両手で握つたら体が真二つに裂けて死んで了つたとか。自分の子を握り殺した話は是だけです。由四里は中々豪胆者でしたので、大力を頼んで世之主様に迄度々不礼を致したものである。

或日、どんな場合でしたか、世之主は由四里を手討ちにせねばならぬという事でした。世之主様が斬りかかると六尺ばかりの杖を持ったまま、由四里は例の望め場所クナハまで一飛びに飛んで行った。世之主様が後を追つかけてクナハまで参ると一息にまた海岸まで飛んで行く、それが中々に敏捷なものである。世之主がまたもや追っかけてやると、此度は海岸の崖の上から沖の瀬まで又一飛び。ハタマの中へ杖を突き立ててその上にすがりながら散々に悪口を言つていたという話。

今其のハタマを「由四里ガタマ」と呼んで居て、フーミ魚の集まるを以て名高い所である。

四 唐馬の角の由来

かねて永良部に角力の名手の居る事に感心して居た那覇の王様は、近頃永良部から渡つて来た美髯で評判の真

千代の鬢を見度いと考えて居た。

或日、宴会の席か何かそこは善く分らぬが大勢の人集まりで王様が「真千代兼近う寄れ」との仰せがあった。真千代兼は、恐る恐る進んで参ると、王様は斜ならずお喜びになりお手をのべて真千代兼の鬢を撫でながら「音ど聞ちやる、話どきちやる永良部真千代兼が鬢」と言ひざま二つに振分けて両手で引張った。真千代兼は痛くてならんのを王様のする事だからと思ひ凝つと耐えて居た。王様は戯れて此度はむしる様にうんと引張る。真千代兼は堪えかねてアイタと呼んで王を肘突きにして了つた。王は怒るかと思つと、却つて真千代兼の愛敬をお誉めになつたが、家来の者連が「永良部の奴等はただに置いてはならぬ、先年の角力の仇をこうして報いやる」と真千代兼は遂々唐に遠島と言う事になつた。

角力の仇というのはこういう話である。王様の家来たちが那覇と永良部と角力を取らせるといふ事になつた。那覇は中々屈強な大男、こゝも永良部の名高い平安統シユ。丁々発止と暫くもんで居たが、平安統が少し弱く見えて来る。友達の荒里が気点を利かせて「荒里よ、お前も中々の力じゃ、もう負けても構はん此の平安統が仇

はうんと打つてくれる」と、自分を平安統と名乗つて意気を張つて見せると、那覇の男「荒里さえ此の強さだのに更に新しに平安統が居てはおれも堪らぬ。」とても思つたのでしよう。腰が抜けてとうとう永良部が勝つた。那覇の者たちは後で謀られたと悟りはしたが仕方がない。江戸の仇は長崎でという形で真千代兼が遠島された。真千代兼は、唐に渡つて女の子一人出来た。これに、マートと名づけて永らく暮らしていたが、とうとう妻子を置去りに永良部に帰つて来た。

後、真千代兼の調度其他が送つて届けられてそれが今古里の子孫に宝物として残されて居る。俗に唐馬の角と称して世間の呼び物となっているのは、其の宝物の内の大きな曲玉である。

五 山田の爺の伝説

昔、内城の城の麓、山田という所に老いの夫婦が居ました。或日媪さんが根喜名に汐汲みに出掛けますと、波にゆられて大きな箱が浮いて居ました。之を取つて打開けて見ますと中にすやすやと赤坊が眠つて居ました。媪

さんは是を連れて帰つて爺さんに示せば爺さん大喜び。

手の上に乗せて大切に育てて見ると唯の素姓ではない。遂々世之主様のお目に止つて武芸の稽古という事になりました。が、中々上達が早いので是から世之主の色々の試験を経て、武芸修業の為上国という事になりました。山田の爺様は御蔭で附近の田地を賜つて、年々作物は実る、お倉が幾つも立つ、立派な分限者になつて、百歳になつても中々の元気。百五になる、百十になる、年を取るに随つて腰が曲つて顔の容まで鼠のようになつたが：顔一ぱいクジマが附着して了つたが：それでも中々の元気でした。丁度百二十の時から食べ物を上らぬ様になつたが、又それでも幾日も生きて居られた。さあ大変、生き神というのはこんなものだらうと村の人々が騒動して、生きなからに葬るといふ事になりました。葬つて置けば石戸の穴からほうて出で来る。はい出せば又も葬る。何遍もこうして遂におさまりました。

話は是だけですが、その古屋敷の東の方には、当時の庭蘇鉄が横はつて其の枝が今は大蘇鉄になつて居る。側にお墓があつて墓に献燈が立つている。

延享四年卯年十二月十五日喜美留与人池悦と書いて

あつた。この墓はもと屋敷の北二丁程の所に在つたのを近頃といつても七、八十年前大城村の人々が今の所へ直されたとの話である。